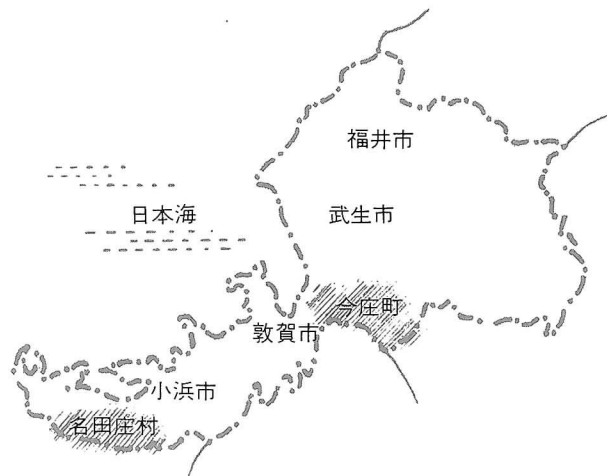


福井県 今庄町、名田庄村

半数の寺院に 後継者がいない



《戦後の社会変動と寺院の状況》戦後、産業構造の変化により、若年層が流出、とり残された老人がほそぼそと寺院を守っている。

福井県は日本海に面し南北に長い海岸線を持ち、そのため生活圏として南北に分断されている。戦後、林業の不振の影響が大

きく、また農業も第二種兼業農家や、非農家、又は老人だけの兼業農家に変わりつつある。このため若年層は都市部に出て行き、残された人々も高齢化が著しい。

このような社会変動に対して、寺院も変わらざるを得なかった。今まで寺院を支えてきた檀家の家制度（封建的身分制度）が戦後の民主主義により崩壊し、老人農業と同じく檀家の高齢化が進んだ。寺院は現在の状態を維持するのが精一杯で、檀家の増加も望めない状態である。このような状況にある寺院が都市部を離れた地域に多く見られる。檀家が都市部に流出し、檀家数が一〇軒前後の寺院が多い。

若い人や子供がいなくなり、老人とともに取り残された寺院というイメージが強く年寄りや先祖伝来の土地と菩提寺を守っているといえる。

《後継者がいない現状》自然条件の厳しさとともに、檀家の減少による寺院の生活苦また、檀家の寺院に対する干渉が強く、後



住職の尼僧が亡くなって以来、無住の寺

継者が育たない。

現在、福井県には過疎指定町村が六地域あるが、今回は地元の宗会議員及び福井県各宗務所長の要請により、南条郡今庄町並びに遠敷郡名田庄村、また代務寺・後継者問題に悩んでいる寺院を選んで調査を行った。

今庄町は、昭和五五年の町勢資料によると、昭和三五年北陸トンネル工事以後、人口は年々減少を見せている。年齢別では五〇歳以上・二〇歳以下が多く、青壮年層が少ない。若い人は近隣の公共施設に勤め、農業は大半が老人の兼業農家になっている。若い人が出ていくのを防ぐために、農地は宅地化されベッドタウン化の傾向にある。また核家族化が進み老人と若い人との間の断絶が問題になっている。

名田庄村は、九六％が山林で占められ、林業が主軸をなし、若干の農業、商業は日常生活を満たす程度である。また雪が多く若い人は都会に出、村には老人が多い。名田庄村には、現在二〇の寺院があり日蓮宗

一カ寺を除いてほとんどが禅宗寺院である。表一を見ると、後継者が一人もいない事がわかる。この原因について考えてみると第一に寺院生活だけでは食べていけないという理由が上げられる。表には「兼職」は二カ寺だけだが、その他にも役所の年金や厚生年金・老齢年金により生活収入を得ている寺院が多い。また檀家の畑を借りての自給自足、生活用具等は住職自らが作っている寺院もある。

第二に檀家が寺に住職の常任を望まないケースがある。住職が来れば、生活保障や、経費がかさみ、むしろ、檀家の負担になってしまうからである。

第三に、各寺院のほとんどの檀家数が減少している事がわかる。若い人が都市に出ていき、その後、家族ぐるみで移住するケースも見られる。

第四に、寺族の日常生活に対する檀家からの過干渉が上げられる。葬儀の際には町中の人が寺に集り、台所は我家のように使われ、冷蔵庫の中まで勝手に使われてしまう。このことを過干渉と見るか、檀家の寺への親しみと受けとめるか、意見の分かれるところである。多くの若い後継予定者は過干渉と受けとめている。

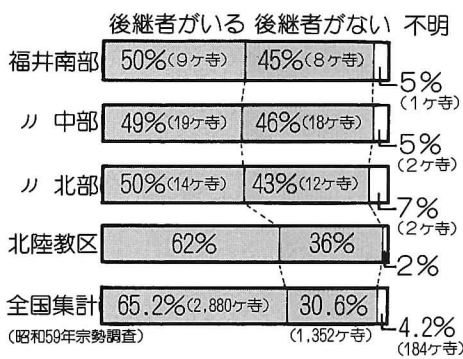
第五に、自然環境の厳しさがある。冬は雪のため、路線バスがストップしてしまい、走っている時でも自家用車の普及で利用者は少なく、今年いっぱいまで廃止という所もある。また路線バスが廃止となって町がマイクロバスを運行している所もある。

今回の調査では、このような状況下におかれている寺院の実状が浮きばりにされた。(図表一)

図表 1

寺名	場所	人口 (昭和55年)	過疎 指定地域	住職の 状況	後継者の 有無	過去の 檀家数	現在の 檀家数	特 色
A 寺	今庄町	5,859	○	常住	なし	60	21	真宗の地盤。日蓮宗に改宗した後も、真宗の仏壇にて祀られ、法華に改宗しようとする、親戚より圧力が加わり、改宗困難な状況である。
B 寺	今庄町	5,859	○	常住 (兼職)	なし		13	真宗の地盤。檀権が強く、寺族が寺を出された事もあった。
C 寺	今庄町	5,859	○	無住	なし	10	8	真宗の地盤。尼僧が住職をしていた。現在はB寺が法務を兼ねているが、交流はない。檀家は境内の清掃や墓参りをしている。
D 寺	今庄町	5,859	○	常住	なし	40	16	山間部にあり、雪積が多い地域。総代六人という組織があり、寺院護持は維持できるが、寺族は辛抱が強いられ、忍耐力がないものは無理。
E 寺	今庄町	5,859	○	常住	なし	16	14	雪積が多く、檀家の畑を借りて自給自足を行っている。檀家は熱心だが、住職を常に無視する傾向にある。
F 寺	美浜町	13,036	×	無住 (代務)	なし		2	町内7カ寺の内、常住は禅宗寺院のみ。「T」家一族だけが、寺を護持している。
G 寺	名田庄村	3,130	○	他寺寄住 (兼職)	なし		16	禅宗の地盤。住職は近隣の市内に住み、行事の時だけ法務を行なう。
H 寺	武生市	67,104	×	常住 (病氣療養)	なし		108 増える傾向	福井県内で「南越地方」と呼ばれる地域一番の都市。しかし住職は寝たきりで、法務は代理の人が行っている。
I 寺	大野市	41,901	×	常住 (尼僧)	なし	12	10	現住職の尼僧は法務のみで、信仰指導だけで生活している。荒廃寺を復興させたが、尼僧の後継者はいない。
J 寺	大野市	41,901	×	無住	なし	10軒以上	4	檀家4軒が三年がかりで同寺を復興させた。しかし、かなりの過疎地にあり、宗務所長や参事も場所をよく知らなかった。

図表 2
福井県日蓮宗寺院の後継者（昭和58年6月現在）



《統計資料から読みとれる後継者難》県内寺院の約半分が後継者難である。昭和五十九年度日蓮宗勢調査報告書に基づき、北陸地区の「後継者の有無」を見ると、「いる」六二％、「いない」三六％となつてゐる。北陸地区寺院の三カ寺に一カ寺の割合いで、後継者がいないということがわかる。後継意志のない理由を高い比率から上げていくと、「経済的に不安」三六・四％、「他の資格を活かす」二二・七％、「寺院生活が嫌い」僧職に魅力がない」共に一二・六％である。

これは、農村を中心とした過疎的環境の悪さからくる寺離れや、寺院内部に存在する様々な問題も含まれていると思われる。これを福井県日蓮宗寺院に限ってみると（図表2）、県内総寺院数八五カ寺のうち四二カ寺、四九％が「後継者がいる」、三八カ寺、四五％が「後継者がいない」、五カ寺、六％が「不明」である。南部・中部・北部ともに、全体の比率と同率に近く福井県では二カ寺に一カ寺の割合いで後継者がいないという実状がある。

《まとめ》福井県は日像上人の伝道された地域でもあり、また歴史的に宗門の名僧を輩出している土地でもある。にもかかわらず、今日県内の半数の寺院が後継者の見通しがないと訴えている。特に尼僧寺院の後継者が皆無である。

こうした状況を、地域的にみると都市部より農村の過疎地域に多く、また路線バスも廃止されるような僻地、檀家数も少ないという寺院に多数みられる。

このように、今回調査した福井県の現状は、様々な社会変動が檀家制度を揺るがし寺院活動を弱めていった。さらに農村地区に多く認められる寺院と檀家との因習的な拘束性も後継者難の一因となっていると思われる。以上まとめてみると、

第一に過疎化現象である。これは都市部を離れた地域に多くみられる。

第二に僻地寺院の生活困窮問題である。僻地寺院の住職ほど兼職を強いられており経済的貧困が問題である。

第三に伝統的な因習による寺檀関係の問題である。住職・寺族のプライバイシーが保障されない面があり、時代に即応した寺檀関係が必要である。

福井県の一〇年後、二〇年後を考える時さらに住職不在寺院が増大することは確実と思われるし、それに伴い県内における宗門の伝道活動は憂慮される事態に落入ると考えられる。このような事態に早急に対応しなければならぬ事は、福井県だけに限らず、宗門全体の課題と言える。